

# 『装甲悪鬼村正 迷宮騎』

イーストプリースト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

装甲悪鬼村正の世界にクトゥルフ神話をいれたものです。  
原作との乖離が著しい二次創作ですのでご注意ください。

目次

## 『装甲悪鬼村正 迷宮騎』

雨が降っている。

傘を僅かに傾け、山田<sup>やまだ</sup> 浅右衛門<sup>あさうえもん</sup>は目を細めた。

「父はここに……」

堀。白塗りの漆喰で固められた白塗りの堀に囲まれた日本家屋。

長い黒髪をした女性が、山田<sup>やまだ</sup>のすがたを認めると誘導する。

首切り役人である彼がここを訪れた理由は一つ——介錯のためだ。

元は武家であり、今は市役所に努める彼女の父が乱心を起こし暴れたのは先日のお話である。

これまで温厚で知られていた彼がなぜ乱心を起こしたのかはわからない。

ただ、日に日に悪夢にうなされやつれ、正気とは思えないことを言っているらしい。

——いわく、地下には神がいる。

——いわく、あのようなおぞましい死を遂げるぐらいならば。

なにが彼の正気を失わせたのかはわからないが、これ以上の醜態をさらすぐらいよりは、と本人のたつての希望で、首切り役人たる山田<sup>やまだ</sup>が呼ばれたのである。

江戸時代はすでに一世紀以上前に終わり、介錯は合法ではないが、しかし、武家の習いとして黙認されている。

さすが武家と呼ぶべきか。簡素な庭にたどりつく作法はすでに住んでいた。

白い死に装束を着用し、落ち着いた様子で正座をしている。

沐浴はすでに住んでいるようで、痩せこけた頬には安堵の表情が浮かんでいる。

「西尾殿」

「来ましたか、山田殿」

「最後の食事はとられますか？」

「いえ、時間が惜しいので手早くすませてください」

「今生の別れとなりますが、それでよろしいのですか？」

「……お恥ずかしながら、これ以上、生を繋げて恐怖に晒され続けるよりも早く解放されたいのです」

「そうですね」

北面から娘が紙に包まれた短刀を西尾にしお 杉すぎに渡す。

雨が強くなった。

傘を畳み、立てかけると、山田やまだ持ってきていた太刀——無銘——を抜き、清めると、西尾《にしお》の背で八双に構えた。

西尾にしおの顔に緊張がはしる。彼の喉がなる。

しばし短刀を見つめる。

どれくらい時がたっただろうか、一刻、二刻、たんたんとして過ぎていく。

娘は父の死にざまを見たくないのか、顔をそらして家屋へと走っていった。

やがて、西尾にしおが大きく息を吸い、右から装束を肌脱ぎする。

左手で腹を押すように撫で、手にした短刀を左腹に当てる。

苦悶の聲が上がった。

八双に構えた山田やまだが南無阿弥陀仏と唱えながら刀を振り下ろそうとして、信じられない者を見た、と目をむく。

赤い血が垂れ下がる西尾の腹から、白くゼリー状の芋虫のようなものが勢いよく放たれたのだ。

しかし、山田やまだも熟練の首切り職人。

深い呼吸を一つするとすぐに平静を取り戻し、一刀。

肉を裂き、見事に骨の間を通し、皮一枚を残して、介錯を終わらせた。

ゼリー状の芋虫たちの上におちた首を拾い、清める。

それを厳かに首桶に納める。

「……なんだ、これは？」

それは異形であった。

白く丸っこい身体に、複数の赤い目が頭部らしき場所についている。

複数の足でのろのろと動く姿は芋虫を連想させた。

さて、異形の怪物であるがどうするか、と迷い。

とりあえず、これらが西尾氏にしおを苦しめた原因であろうと、全て踏みつぶし、首桶をおさめに家屋の中へと山田やまだは歩んでいった。

+

《帰らなくてもいいのですか?》

「さすがに今日は遅いからなあ」

劔青。契約者に超常の力を与え、纏えば鬼神の如き戦闘力を発揮する武装。

その劔青を所有し、契約を持ち、纏うものを武者という。

山田浅右衛門やまだあさごえもんは武者であつた。

無理をして歩けば帰れない距離ではないのだが、夜も更けてきたため、娘からの引き留めで今日はとまることとなつた。

潜んでいる自らの劔青——千人切せんじんぎりへの返答をおこないながら、山田やまだは用意された布団の中へと潜つていった。

《御堂、起きてください》

「……?」

千本切に起こされ、いそいそと布団から抜け出す山田やまだ

「どうした?」

《なにか巨大なものが近づいてきてるんですが……なんででしょう、これ?》

「俺に言われてもな……わからん」

《方角は百九十五いぬとの方向ですが》

「西尾氏の書齋があつたところだったかな」

ひよいと立ち上がると、山田がそつと襖を開けた。

とりあえず、確かめてみようという腹だった。

「娘さんの方は?」

《熱源感知を行う限り、……こちらに近づいてきてますね》

劔青には感知能力があり、通常の視覚以外にも熱源を見る熱源感知、微弱な電波を放ち周囲を探索する信号探査などがある。

「音で目が覚めたのかね。まあ、気づかれないようにな」

《ふふ、千さんの隠密能力に任せなさい》

「はいはい、頼んだぜ」  
気配とは。

固有の感覚として気配というものがあるのではなく、音であったり、動きであったり、匂いであったり、それらの複合である。

それらの情報の複合であるが、この場合、気配を探るのはたやすかった。

廊下の端から歩いてくる足音、恐らく娘さんだろう。

こちらに気付いてるかわからないが、驚かせるのもしのびないの  
で、軽く壁をノックし、

「もし、すみません」

「……！ 起きてらしたのですか？」

「変な物音で起きたところさ、そつちもそんな感じかな」

「はい、泥棒じゃなければいいのですが……」

「まあ、見てみましようか」

そろりそろりと西尾にしお 杉すぎのいた書齋へと歩いていく。

近づくと、ごとごと、と音が鳴り響いていた。

「!!」

「ツ！」

襖を勢いよく開く。二人は息を飲んだ。

室内が緑色の光に包まれていたのだ。

謎の発行の原因は一枚の鏡であった。

置き鏡。

それは淡い緑色の光を放ち、室内は異様な雰囲気きふんきに包まれていた。

その鏡の向こうから、異形がはみ出していた。

青白く醜い巨軀に、楕円形のぶよぶよとした目を無数に張りつけ、  
像のように厚く太い足を持っている。山田やまだが介錯けいさくした際に出てきた  
怪物に似ているように見える。

咄嗟に娘を突き飛ばし、扉から距離を取らせる山田やまだ。

突き飛ばされた娘は呆然としたまま、虚空をみつめ何事かぶつぶつ  
とつぶやいている。

せめて、逃げてくれればと舌打ちする。

「——装甲だ、千人切ッ！」

《諒解。宣誓を》

装甲の構え。

武者が己の劔冑を纏うための動作。

紡がれるは己が劔冑を纏い一体化するための宣誓の言葉。

——諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅為樂

——世に永遠に生くるものはなし

途端、青い燕は甲鉄の渦となり分解され、山田の周囲へとまとわり

つき、再構築される。

一瞬のあと、そこには青い装甲に包まれた武者がいた。

山田は脇差を抜いて怪物と相對する。

狭い廊下で太刀を構えれば、思わぬところに刺さり動きを阻害する可能性があるため、脇差を選んだ。

山田の姿を認めた怪物が、赤い瞳と明滅させ、白い触手を伸ばして叩きつけてきた。

遅いな。というのが山田の感想であった。

飛んでくる銃弾であっても無造作に撃ち払える武者の反射速度からすれば問題なくさばける速度。

振るわれた触手を容赦なく切り落とす。落ちた触手は液状に溶解した。

このまま倒せるか？と疑問に思った目前、切り落とした触手が即座に再生した。

武者の強化された目をもってしても一瞬にしか見えない速度の再生。

「厄介極まるな。合当理を吹かせれば逃げれそうではあるが……」  
部屋を全て覆うような巨体。

あの巨体で押しつぶしてこずに触手で打ち付けて来るだけにとどめてるのは、単純にまだこちらの部屋に完全に出て来れてないだけだろう。

《その場合、彼女は置いてけぼりになりますね》

「だよな。……となると、怪しいのはあの鏡か」



武者である彼としては完全な脅威とは言い難いが、それはまだ完全に出現しきれないからだ。

さすがにあの再生速度で迫ってこられたら、武者と言えど圧死する可能性はある。

つまり、いまのうち対処しなければならぬ、と山田は腹を括る。

「――陰義だ、千人切」

《諒解です！ 呪句を》

「刀気増強」

打ち振るわれる触手を切り捨て、踏み込む。

切先が淡く赤い光を放つ。

空いた手で太刀の濃い口を切る。脇差を納刀した。

水鷗流合戦剣法 “暁” が崩し――

山田が地を蹴り、腰を切る。

この動作により重心が前方へと押し出され、鞘から太刀が抜かれた。

赤くゆらめく光を纏う太刀が月明かりに照らされる。

―― “紅葉”

触手を切り裂いた一刀は、そのままの威力で青白い巨軀を貫通し、今にも出ようとしていた鏡ごと一刀両断した。

陰義。一部の真打劔冑が持つ、超常の力である。

千人切が持つ陰義は「剣圧強化」

刀は切る際に対象物との間に圧力を発生させ、物理的に引き裂いていくわけだが、その剣先に発生する圧力を強化するだけの単純な陰義である。

しかし、単純であるゆえに威力は高く。部屋一つを覆っていた異形ごと鏡まで一刀で切り裂くのも容易であった。

鏡が原因だったのだろう、青白い巨軀は消え去り、静かな夜が戻ってくる。

余波で破壊された壁の向こうからは月明かりが差し込んでいた。

+

「昨日はどうもありがとうございました……」

「いえ、こちらこそ。……劔冑のことは内密に」

「……………はい」

劔冑狩り。

現政権である六波羅が行った政策であり、市制の劔冑所有を禁じ、劔冑の提出を強制する法律である。

役人である介錯人ではあるが、軍属ではない山田やまだもまた劔冑の所有は禁止されているため、六波羅幕府にばれば後ろ手に縄がかけられるだろう。

「しかし、昨日は災難でしたが。あの化け物にはなにか心当たりはありますか？」

「いえ、私は何も知りません。ただ、あの鏡は父が知り合いからもらっていたと思います。

確かあの書齋に手紙とかあったと思いますが……」

「無事だといいなあ……」

二人はしばし見つめ合い、苦虫を潰したような顔となったあと、困ったように首を傾げた。

『おや、昨夜はよく眠れましたか？ いやあ、こっちは昨日から月が綺麗で退屈しなかったですネー』

昨日から見張りをさせていたことに対して言外に恨み言を込めながら千人切が金打声メタルエコーを飛ばしてくる。

『それはそれとして、この鏡に関係しそうなものを集めておきましたよ』

青色の燕が羽先でいくつかの文章と鏡を指した。

鏡は昨日の『紅葉くれは』で粉々に砕け散っている。破片の裏をしてみると、理解不能な文字が刻まれていた。

山田やまだと娘が資料を読んでもみると、それは日記であった。

——知り合いの代官からもらった鏡を貰った日に、冒瀆的な青白い神から幼虫を植え付けられた夢を見て、それ以来、夜な夜なうなされるようになった。

——あれは神だ。迷宮の奥深くに住む、まつろわぬ神。あれはもつ

と多くの供物を欲している。

このままであれば娘の綾も犠牲となってしまうだろう。

それよりも前に、この命を絶つことで神つながりを断つのだ。

綾よ、弱い父を許してくれ……。

「阿衣穂徒か……」

最後に載っていた神の名前を読み上げる山田<sup>やまだ</sup>。

「ああ、お父さん……」

口元を抑える娘——綾<sup>あや</sup>。

彼女を慰めつつ、山田<sup>やまだ</sup>は日記を手を取った。

「すいませんが、この案件、預かってもいいですか」

「どうしようというのですか……?」

「一応、阿衣穂徒<sup>アイホート</sup>がどういうものかはわからないと対処のしようがありませんので、こつちで調べてみます。幸い、私は公務員ですので、あの程度の伝手もありますので」

こくり、と娘はうなずいた。

「お願いします。このままだと父も浮かばれそうにないですので……」

「任せておいてください」

山田<sup>やまだ</sup>はうなずいた。

『で、安請け合いましたわけですけど、大丈夫ですかねー?』

「カツコつけるぐらいだろう。それにまあ、完全に他人のためってわけじゃないぞ」

『どういうことですか?』

「俺も巻き込まれてるからな。きっちり調べておかないと何があるかわかったもんじゃない」

『ま、それもそうですよねー。それでどうしましょうか。首きり役人はたしかに公務員ではありますけど、代官との伝手なんてありましたっけー?』

「ないな。俺にはない……が、こういうときはある奴をうごかせばいいのさ」

家の蔵から持ち出した日本刀を一つ、山田<sup>やまだ</sup>は手に取った。

軽く濃い口を切り、刀身を空にかざし、確かめる。

「良し」

そして、頷いた。

+

御試御用。

刀の切れ味を確かめ、その鑑定を行い、銘を入れる職。

現在はすでに離れて久しいが、かつての家業であり、その縁か裕福であった代にいくつかの名刀を仕入れることができた。

そのうちの一本と引き換えに知人に、西尾家の資料にあつた代官――ししど穴戸ほしど星と謁見するように場を整えてもらったのである。

「いやあ、忙しいところに、こんな介錯人のために時間をとってもらえるなんて有難い限りですね」

「いえいえ。それでどんなご用件で？」

「アイホート阿衣穂徒」

砕けたガラスの破片を机の上に置いた。

「ばつさりと聞きますね。……これは一体なんなのですか、妖怪か化け物の類か？」

「神ですよ」

「神……？」

「ええ、迷宮の奥にいる虚ろな神様です。」

正しくは外国の言葉で『アイホートアイホート』と申しまして、人類が生まれる遙か以前からこの地球に存在しているらしいですよ？」

「なにをいつている……ですか？」

「まあまあ、お聞きなさい。あなた、かの神の幼虫を殺しましたね」

「……なぜ、知っているんだ？」

「教えられたからですよ。……かの神様はね、選択を迫るのですよ」

穴戸は好々爺とした印象の老人だ。

胡麻塩頭に、眉間には深い皺が三本刻まれ、垂れ気味な目が人の好きそうな印象を与える。

年に似合わない張りのある声。肩幅は広く、見た目に反して体格はがっしりとしているのだが、小さく見えるのは歳のせいだろうか。

そんな普通の老人が、特に声を荒げる様子はなく、当たり前のように異常を語る姿はなんとも不気味であった。

「相手の腹に幼虫を孕ませるか、それとも押し物されて死ぬか、その選択を選ばせるのですよ。その上で、幼虫が孵れば死ぬ。いやはや、酷い話ですよね」

「……何の話を……？」

じんわりと嫌な予感がはしり、やまだ山田が唾を飲む。

あの時の記憶が思い出される。あのねじくれた異形はなんのために、あらわれようとしていたのか。

「もう一つ付け加えましょう。あの神は自らの子を殺されるとひどく立腹するのですよ。」

たとえば、その仇が目の前に現れたら確実に殺すように命令するぐらいには、ね」

がたり、と音がした。

部屋の隅から現れたのは一体の劔冑。

新緑色に輝く、蝸牛であった。

『よそになど佛の道をたづぬらん我が心こそしるべなりけれ』

「千人切っ!!」

慌てて椅子から飛びのき、地を転がる。

その上を一閃が通り過ぎて行つた。

装甲を終えたやまだ山田の前に、ししど穴戸が立ちふさがる。

新緑と藍色の武者が相對する。

「……飛んで火にいる夏の虫ってわけか」

「すいませんね。あなたにうらみはないのですが、神の命令に従わないと、私も腹の中に幼虫に貪り食われてしまうのですよ」

やまだ山田がため息を一つ。

「そりや、つらからうて。介錯は一ついかがかな、ご老体？」

「いえいえ、私もまだ若いものに負けるつもりはございませんよ」

じりじりと、じりじりと互いに構えを変えながら、すり足で距離を測っていく。

そして、新緑の武者が肩に担ぐように太刀を構えた。

来るか、と身構えた瞬間、穴戸ししどが後退し、窓から外へと身を投げ出した。

「そこではちよつと手狭でしてね。こつちの方へ行きましょう」

「あ、テメエ!？」

それを追い窓から飛び出した山田やまだも背の合当理を吹かし、宙を飛んだ。

武者の装甲は堅牢である。

戦車の正面装甲すらも凌駕し、戦車砲を無防備に喰らったとしても傷一つつかない。

その戦車装甲を一撃で切り裂ける脅力を所有者に与え、さらに強化された武者の力をもってしても装甲の上から斬り伏せることは困難である。

ならば、どうすれば、その装甲を超えて武者に損傷を与えることができるか。

主な方法は二つ。

一つ目はその装甲が覆っていない関節部などを狙う。

もう一つは高さだ。

空高く飛び上がり、高空からの位置エネルギーを太刀の乗せて生じる破壊力でその装甲を打ち破り致命傷を与える。

そのために武者の背中についているのが合当理がったりである。

騎航戦を行うために、熱量を推進力に変えて空を飛ぶための機関。

その合当理を吹かし二人の武者が空を飛ぶ。

先行しているのは、穴戸ししど星ほし。

『さすがは池田正宗いけだまさむね。将軍家で用いられたこともあるだけあって、速度あしはあつちの方が上ですな』

「どつちかというと、千人切こっちは旋回性こまわりが売りつーのもあるが、それを抜いてもあつちのほうが明らかなに早いな」

兜頭ピッチを上げ、追いつがってはいるものの敵機の姿はみるみるうちに小さくなり、反転した。

『敵機反転。双輪懸の態勢に入ります!』

「――さて」

空中戦において高度を取られることの不利はいくつかあるが、一番わかりやすいのは速度だろう。

上から降下しながらの攻撃であれば、重力に加速されそのまま威力は増加するが、逆に下を取られたものは重力に引かれ減速し、威力が減衰する。

それはそのまま白兵戦に置いて明確な差となる。

穴戸の袈裟掛けを、柄を掲げるように山田は流す。

そのまますれ違おうとした山田の腹部を、穴戸の返しの一撃が捕えた。

「——ツウ、畜生ツ」

『腹部、損傷軽微』

山田が歯を噛みしめる。

「おや、ちよつと威力が殺されてしまいましたか。やりますねえ」

「よく言うわ……！」

そのまま反転。お返しとばかりに、再び上昇を始めた穴戸に右袈裟から切り掛かる。呼応するかのように左袈裟の一撃を穴戸が放ち――

「ッ!？」

山田の一刀が空を切る。

打つと見せかけて躲す、武の一撃。

山田はまんまと穴戸に誘い込まれたのだ。

空を切らされた山田の横を悠々と穴戸がすり抜け、高度を稼いでいく。

「あのためきジジイ！」

『うーん、相手のほうが一枚上手ですねえ』

「手間取っていると六波羅とか来そうだしなあ」

名目上、劔冑の所有は六波羅所属の軍人以外は禁止されており、それが街中で戦闘しているとあつては、放っておく通りはない。

条件は同じようだが、現在、ほぼ六波羅幕府の独裁下にある大和においては幕府の代官である穴戸が山田から襲われ自衛のために装甲しました、と伝えれば非は山田にあるととられるのは確実であった。

急旋回し、すぐに上昇を始め——ようとしたとき、山田の背に冷や水をかけられたような緊張が走った。

『敵騎から膨大な熱量の消費を感知。陰義が来ます!』

「さて——このまま時間を稼いでいれば、恐らくは六波羅軍来るとは思いますが」

「ちらり、と藍色の武者を見る。」

速度はこちらのほうが高いようだが、旋回性はあちらのほうが早いようで鋭角に近い旋回も難なくこなして、背後を追ってきていた。

「取り調べにでもなつて、万が一にでも緑龍会とのつながりが露見しても困りますしね」

『御堂、それではいかがする?』

「いきますよ、池田。私も武者の端くれ、ブルフアイトは望むところではないのですよ」

『承知』

呪句を穴戸がそらんじると同時に、空に響く轟音が一際大きくなった。

仮初とはいえ、武者の騎航戦など滅多にないはずの地上では騒ぎとなっていたが、池田正宗がしのぎを発動した瞬間、その騒ぎはピタリとやんだ。

その音に魂が抜けだしたように腰を抜かしたからだ。

池田正宗、その陰義は至極単純であった。

合当理の強度と出力の強化、ただそれだけである。

空戦技術が主体の武者戦において、速度とはすなわち力量である。それだけに強化された合当理から吹かれる威力の乗った太刀打ち

は——

「ぐおっ!？」

『胸部甲鉄損傷! 深刻な被害です!』

「厄介、極まる……なあ!!」

山田の防御をあっさりと打ち破り、ぎっくりと深い傷を負わせた。

「……ッ」

『肺にまで太刀が達しています。胸部の再生を優先します!』



「頼む……ッ」

『気を付けてください、熱量を使いすぎると熱量欠乏を起こしますから』

返事をする気力もなく、軽く頷いて山田やまだは返信を返した。

武者に超常の力を与える存在である劔冑。それが超常の力を与える源は武者の熱量である。

熱量が続く限りは装甲や武者本体の再生も可能ではあるが、熱量を使い付ければ熱量欠乏を起こし、動作が停止する。

そして、空での熱量欠乏はそのまま墜落を意味するのである。

『敵騎、百七十五度下方より襲来!!』

「刀気……、増強!!」

千人切の刃に赤い光が宿る。

彼女の陰義は剣圧強化。その本質は圧力の強化である。

剣先に発生する圧力を強化し切断力を上げる陰義であるが、同時に圧力の強さであるゆえに、当たり強さも向上するのである。

「ッ——オラア!!」

「ほうほう、やりますねえ……」

ぎりぎり受け流すことができたが、手傷を負うのは避けられなかった。

『……どうしますか、御堂。千さんに速度差を覆すような機構も陰義も備わってはいませんか』

肺、胸部の再生をおえ、息ができるようになると思考が明瞭になってきた。

水底に引きずり込まれるような苦しみでは頭を動かすこともままならなかったからだ」

「白兵戦能力の高さが売りだもんな。装甲が厚くなかったら、さつきので一刀両断だわ」

『ええ、ですが、いま必要なのは剣戟の強さではない。斬った張ったが強いというのも無用の長物です、よよよ』

「魔剣、秘剣のたぐいでも習得すればよかつたんだがね。つとお!」

急襲してくる穴戸ししどの攻撃を凌ぐ山田やまだ。

陰義が持続してる間は、受け流すことが可能だろうが、途切れた後は難しいだろう。

「しっかし、やっこさんの陰義はやたら長く続くな」

『かつての小竜景光は音を置き去りにするほどの速度が出たと聞きます。それほどの出力はでないかわりに持続性に特化してるのではないのでしょうか』

「なるほどな……なら、削られ続けるこっちが不利すぎるってわけか」  
穴戸ししどが籠手を狙って切りつけてくる。

それをハの字を描くように受け止めようとして、その動きをすかさずさける。

切りつけようとした動きは偽フェイク、そのまま一回転して山田やまだの防御を外したのだ。目を見開く山田に太刀が一つ見舞われた。

「ツ、ぐぐ……ッ！」

『面部装甲被弾！』

頬を大きく切り裂かれ、面部に割れ目が入る。

このまま防戦一方ならば、遠からず削り殺されてしまうだろう。

「……速度か」

割れた面より上空を見ながら、山田やまだがぽつり、と。

『どうかしましたか？』

「さっきの秘剣で思い出したのだが、一つだけ手があるかもしれない」

『ほおー？ どんな手品を見せてくれるのです？』

「なに……魔剣の真似まねごとさ」

兜頭ピッチを上げ、山田が上昇していく。

『敵騎、上昇』

「ふむ。追いつけそうでしょうか？」

『可能。しかし、高高度での陰義使用は推奨しない』

「まあ、ですねえ……。熱量もそろそろ厳しくなってきました。」

上空へと進み続ける山田やまだを見ながら、ぽつりと。

高度を上げれば上げるほど気圧の変化が激しく、それに伴い速度の制御は難しくなる。

しかも、さきほどから見る限り、敵手の陰義は撃剣を強化する類のようであり、速度を補うすべは持っていないようだ。

ならば、戦域からの離脱か。だが、離脱するにしても上空への離脱は悪手である。

上昇すればするほど速度を失い、せつかくの高度を取ったときにはすでに敵手は背後に迫っているであろう。

「追いますよ」

『御意』

それが分かっているゆえにこれを逃す手はなかった。

やまだ山田が天を目指し加速し続ける。

その背を追いながら訝し気に穴戸ししどは目を細める。

太刀打ちのまま上昇を始めた山田やまだに対して態勢を整えて加速へと移った穴戸ししどの差は歴然だ。

みるみるうちに穴戸ししどの速度は減衰していくが、それは山田やまだの比ではない。

失速し、速度を失い、そのまま落ちてもおかしくない危険域。それでも、いまだ上昇を続ける山田。

こと、此処に至って速度差はゼロに近くなりつつある。

「金翅鳥王剣インメルマンターンでも使うつもりでしょうか？」

金翅鳥王剣インメルマンターン。

垂直降下からの反転落下攻撃。

完全に失速しきる頂点からのタイミングで、その頂を蹴ることで反転し、自分は速度を保ったまま、速度を失った相手に切りつける起死回生の一撃。

かつてこの魔技を用いて撃墜王の名をほしままとしたマックス・インメルマン中尉から名前が取られた魔剣である。

しかし、そのまま墜落する危険があるほどの低速域を制御した上で、刹那のタイミングを見切らなければ実現しないその剣技を操れるものは六波羅全盛期ですらないだろう。

しかし、この詰みに近い状況で用いるということは習得してる可能性が……?と思ったところで、山田やまだがついに失速、横倒しとなり、地

とへ向かって墜落し始めた。

「……買いかぶりすぎでしたか」

『敵騎失速。いまが好機だ、御堂』

すでに速度もほとんどなく、マトに等しい山田やまだに向って合当理を吹かす穴戸ししど。

わずかながら速度は保っており、完全に失速して墜落してない様は見事だが、それもあとわずか、奴が確実に体制を立て直す前に穴戸ししどが斬り伏せるだろう。

自身も陰義の行使により熱量を大分つかっているため、穴戸ししどとしてもこの一撃を外すわけにはいかなかった。

「さて、死んでください」

やまだ 山田が太刀を構える。

「——刀気収斂」

背に太刀を隠すように、大きく振り上げた。

赤く揺らめく光が刃に宿る。

ししど 穴戸はいぶかしむ。

あの構えから繰り出される太刀筋は一つだけ、大きく振りかぶった態勢からの一撃のみ。

あるいは速度が乗っているのなら、相手の防御をうちくだいて太刀をとどかせることができるかもしれないが、いまはそんな力はない。

苦し紛れの一撃か？

『敵騎、膨大な熱量を確認。陰義の行使を推測する』

「ふむ……？ よいでしょう、こちらも陰義を発動します」

目がかすむものの、それでも穴戸ししどは陰義の仕様に踏み切った。

常軌を逸した推量が合当理から吐き出され、武者の常識を超えた速度が放たれた。

「いくぞ、千人切い!!」

『はいさー』

——水鷗流剣法 “望月” が崩し、“酒呑”

ししど 穴戸の一撃が届くよりも早く、やまだ 山田の一撃が振り下ろされる。

しかし、予想通りの太刀筋に穴戸ししどがそれを受け流そうとして——  
「!!」

しかし、一瞬すら持たずに太刀を弾かれると、そのまま一気呵成に切り捨てられた。

「白兵戦なら負けねえよ」

「……なるほど、そういうことですか」

「悪いな、爺さん。そういうことだ」

「私の速力あしを封じるためにあえて死地を作ったのですね」

やまだ山田にとって最大の脅威とは速力であった。

武者の身体強化でもってしても、空を縦横無尽にかけられると穴戸ししどを捕えることは難しい。

なららばどうするか、あえて無茶な上昇を行い、自らの死地を作り、そこに誘い込むことで穴戸ししどの進路を限定したのである。

そうなればあとは速度あしと強化ちからの比べ合いである。

「しかし、先ほどの強化ならば私が押し勝てたと思えますが」

「陰義の効果範囲を狭めて一点強化することで威力を高めたのさ」

「なるほど……しかし、無茶が過ぎるのではないでしょうか。こうなることはわかっていたでしよう?」

「装甲が堅いのが売りでね。そこは千人切を信じてたさ」

しかし、代償がないわけではなかった。

致命傷は与えたものの敵の突貫の速度を殺しきれたわけではなく、激突した。

千人切の装甲も拉げている。穴戸ししどは上半身を斜め半分切り裂かれ、やまだ山田が手を握り支えていた。

「いやはや、やられてしまいましたか」

「遺言なら聞かせ。アイホートについても教えてもらってないしな」

「実は一つ、あなたに謝ることがあります。私もアイホートの雛に寄生されているの言いましたね」

「ああ、……そういえばさつき切ってしまったな」

「ええ。それで、その後、自殺しようものならもしかすると一族の方に

アイホートの怒りが向くのかと思って踏ん切りがつかなかったのですよ。

ですから、あなたを利用させていただきました」

「……つまりあれか、俺を殺せればよし。殺されれば解放されて良しってことか……？」

「はい、そのとおりです」

やまだ 山田は掴んでいる手を離したくなった。

「まあ、その罪滅ぼしというわけではないですが、自宅の私室を訪ねてください。魔導書や日記があなたの助けとなるでしょう」

「……この食えないジジイめ……」

「若者に言われると誉め言葉ですね。……そろそろ時間ですね、目が霞んできました」

「言い残すことはあるかい？」

「私は神を見たかったですが、あんな神を見たくはなかったですね」

「なんで、んなもんにかかわることになったんだよ」

「先の世界大戦に負けて、六波羅が台頭してきて、世の中の移り変わりを見て……絶対的に変わらないものを見たかったのですよ。けれど、それがこのざまです。笑えますね？」

「笑わないさ。善であれ、悪であれ、通したいものはあつただろう」

「……ありがとうございます。優しいですね、やまだ山田さんは」

「どういたしまして。それじゃあ」

「ええ、それでは……さようなら」

「さようなら」

やまだ 山田が手を放した。

+

西尾家。

出迎えた綾あやに山田やまだが奇妙な文字の描かれた首飾りとノートを渡す。

「大丈夫と思いますが、この首飾りと何か起こったらこの儀式を試してみてください」

「これは……？」

「あの奇妙な生物を寄せ付けなかったための首飾りと、それを封じるための呪いを描いたノートです。それにはあの生物を退散させる呪文が刻まれてるそうなので、できる限りつけておいてください」

「大丈夫なんでしょうか……？」

「恐らくは怒りは私に向かうはずなので、そちらにはいかないはずですよ。これはあくまで念のために渡してるに過ぎないので」

「では、あなたは……？」

「劔冑の所持やそのほかの罪で、ちょっと逃げないといけなくなったのでこれから旅に出ます。御息災を」

山田やまだが頭を下げ、その場をあとにする。

「あの、ありがとうございましたー」

背後にかかる声に、後ろを向いたまま、手を振った。

『いやー、大変なことになっちゃいましたね。よかったですか？』

「まあ、武者と一般人なら武者が背負うべきだろう」

アイホートは子を殺したものに怒りを抱く。

普段は迷宮の奥に住み、『門』のようなものを他の場所につなぎ、その姿を現すのである。

それを退けるための首飾りは一つしかなかったのである。

であるゆえに、その一つを綾あやへと渡したため、似たような効果を持つ者を探し、時間を稼ぐことにした。

同時に手に入れた魔導書を——信憑性はさておき——見る限り、一年単位で退ける呪文はあるが、それもどこまで効果があるかは不明である。

それよりはその「神」とやらを殺す方法を探すべきだろう。

「ま、やれるだけやってみますかね」

『はい、それじゃあ頑張りますよねー』

藍色の燕、千人切が宙を舞う。

その横で荷物を背負った山田やまだが歩き出した。